

キャリアは、ひとつじゃない。一副検事という選択。

【自己紹介】 交通部副検事 検察庁に入庁して 24 年目

(検察事務官時・捜査公判約 14 年、検務約 5 年、その他 3 年を経験)

1. 入口——なぜ検察事務官になったのか

通常想像する公務員の事務職とはまた違った業務をすることができるのではないかと思います。入庁前には副検事については知りませんでした。入庁してから副検事という存在を知りました。

2. 現場——検察事務官として、どのような仕事をしていたのか

また、どんなことを考えて、仕事をしていたのか

所在不明になっていた罰金未納者の所在をつきとめ、遠方まで収容に赴いたことなど、目に見える形で成果を得たときのことは印象に残っています。

検察官事務取扱検察事務官（いわゆる「検取（けんとり）」）として単独捜査に携わるようになり、自分で捜査や処理の方針を決めることができるようになったときに、もっと深く捜査に関わりたいと思いました。

検事の補佐役として捜査や公判に従事するほか、その捜査や公判を支える事件の受理や処理、裁判の執行等を担当する業務もあれば、総務・会計等の事務職の仕事も担えるなど、幅広い業務を担当することができる点が、検察事務官の仕事の魅力です。

3. 決断——なぜ、副検事を目指したのか

検取として単独捜査に携わるようになり、自分で捜査や処理の方針を決めることができる

ようになったときに、もっと深く捜査に関わりたいと思い、副検事を目指そうと決めました。

しかし、働きながら勉強しなければならないことや、副検事になると事務官には戻れないので、自分に適性があるか不安に感じました。

副検事を目指すと周りの人に話したところ、少し前に合格した副検事から勉強方法等の助言を受けることができました。

4. 現在——検察事務官としての経験はどう生きているか

立会事務官や検取として働く中で、捜査の基礎について学び、また、事務官の仕事もわかっているからこそ、自身がどのような対応をすべきか、立会事務官や警察に対し、どのような指示をすべきか迷わないことです。

5. 未来——その先に見えているもの

副検事の仕事は、ただ単に法律を適用して、起訴・不起訴などの処分を決めるだけではなく、他人の人生に深く関わる仕事だと思っています。ですから、自分自身を磨き、人や事件に対する興味や探究心を失わず、被疑者や被害者など事件関係者に信頼され、話をしたいと思ってもらえるような副検事を目指しています。

副検事が担当する事件は主に窃盗、暴行、痴漢など市民社会に密接に関わる事件が多く、それを数多くこなすことが求められますが、1つとして同じ事件はないので、1件1件事件に向き合い、治安の維持に貢献したいと思います。

6. みなさんへのメッセージ

検察事務官としてもさまざまな経験ができますが、違うことをやってみたいと思ったときに、働きながら検察官になるという人生を変える選択をすることもできます。そういう仕事

はほかにあまりないと思います。

副検事を目指すならば、職場内で受験に向けた指導が受けられますし、近年は、入庁から浅い年次でも単独捜査をする機会を与えられ、副検事任官に向けた支援制度が整っています。もし途中で副検事の志望を取り下げたとしても、検察事務官として活躍することもできますので、心配はいりません。